

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：32420

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24611019

研究課題名(和文) 発展途上地域における持続可能な観光と地域コミュニティのバランスモデルの構築

研究課題名(英文) Establishment of the balance model for sustainable tourism and community development in developing countries

研究代表者

高橋 進 (TAKAHASHI, Susumu)

共栄大学・教育学部・教授

研究者番号：50360087

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：インドネシア・ランブン州において、ルーラル・ツーリズムやエコ・ツーリズムといった持続可能な観光と地域コミュニティとの関わりについて調査を行った。持続可能な観光を進めていくうえでの地域資源となる農村地域の伝統的家屋および景観が壊れつつあり、その維持や保存のための対策が急がれる。自然を対象とした観光は発展していないが、資源は十分存在している。一方で、沿岸住民のマングローブ林への生活依存および保全意識は都市住民よりも高い。持続可能な観光の成立には、伝統工芸を含めた農村地域や自然地域の資源を、地域住民の意識と生活を尊重したコミュニティ維持を意識しつつ、観光に活用することが求められる。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the relation between local communities and sustainable tourism such as rural tourism and ecotourism in Lampung Province, Indonesia. The increasing dilapidation of traditional houses that draw tourists to the area, and are central to sustainable tourism, are in desperate need of maintenance and preservation. Resources for nature-tourism exist enough in the Lampung area, however it is not developed. Residents in coastal areas depend on mangrove forests more and have greater consciousness for conservation of the mangrove forests higher than residents in urban areas. The results suggested that resources including traditional crafts in both rural areas and natural areas are needed to be exploited for development of sustainable tourism, paying enough attention to maintaining communities where consciousness and life of local people is fully respected.

研究分野：環境農学

キーワード：持続可能な観光 インドネシア・ランブン州 国立公園 マングローブ林 ランプンタピス

### 1. 研究開始当初の背景

観光分野においては、20世紀半ばから後半にかけての先進諸国における観光の大衆化、いわゆるマス・ツーリズムがもたらす諸問題が1970年代から80年代にかけて表面化したため、1990年代に入ると“持続可能な観光(sustainable tourism)”が模索されるようになった。なかでも開発途上国においては、貧困からの脱却に向けての持続可能な観光についての議論が盛んに行われている。

持続可能な観光は、その具体的な手法として、エコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズム、ルーラル・ツーリズムなどをはじめとする環境配慮型の観光形態が主流となっている。現在では、これらエコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズムなどの手法に関する研究は多くみられるものの、ツーリズムの受け入れ側、すなわち地域コミュニティに重心を置き、それらのツーリズムが展開される過程で地域コミュニティがどのように関わり、変化しているかについて考察している既往研究は少ない。しかし、持続可能な観光の推進のためには、その舞台でもある地域コミュニティの対応、変化を的確に把握する必要がある。

### 2. 研究の目的

インドネシアではここ数年、都市部において急激な経済成長を続けている。一方において従来からの零細農業を生業とする農村地域では、都市部との収入格差の拡大が進んでいる。また、そのような地域では、昔ながらの伝統的な農家の家屋や踊りや祭りなどの地域文化の維持、保存が困難になっているケースも多い。

そのような状況において、現在では農村地域の貧困の脱却に向けた方策の一つとして、“持続可能な観光”が提唱されている。そこで本研究では、それらのツーリズムに当該地域社会・住民がどのように関わっているか、またどのような影響を与えているか、さらにツーリズムから住民が受ける便益(単に経済的だけでなく、教育なども含む)などについて明らかにし、その要因を分析する。こうして、持続可能な観光に内包されるエコ・ツーリズム的要素とルーラル・ツーリズム的要素とを統合した持続可能な観光と地域社会・住民といった地域コミュニティとの関わりについて、その望ましい在り方、モデルを構築することを目的とする。

### 3. 研究の方法

(1)研究は、途上国インドネシアの中でも、近年経済発展により観光開発が進みつつも、一方で自然や文化が急速に消失しているランブン州を対象地とした。また、基礎的な資料として、ランブン州政府および関係市庁などの土地利用、観光計画などのデータ・文献類を収集し、関係者へのヒアリングなどを実施した。

(2)ルーラル・ツーリズムと地域社会との関係について、以下の調査等を実施した。

インドネシア国内の観光をめぐる状況を把握すべく、現地ヒアリングおよび文献調査などにより、インドネシアの観光客流動および観光政策の変遷を明らかにした。

スマトラ島南部のランブン州内の農村地域での生活状況や住民意識、都市住民の観光ニーズについて、アンケート調査およびインタビュー調査を実施した。

(3)エコ・ツーリズムと地域社会との関係などについて、以下の調査等を実施した。

ランブン州の自然観光地の代表例である「ワイ・カンバス国立公園」および「南プキット・バリサン国立公園」における自然保護と地域住民の関係について、現地調査と管理事務所などでのヒアリング調査を実施した。

ランブン州における海岸沿いのマングローブ林周辺集落におけるヒアリング調査とマングローブ林への地域住民の意識に関するアンケート調査を実施した。

(4)ランブン州の文化、特に観光と関連のある土産物の開発・販売などについて、以下の調査を実施した。

ランブン州の象徴的な土産物の特定のための芸術モチーフと土産物の変遷などを資料収集と現地調査により明らかにした。

特に、地域文化の代表的テクスタイルでもあるタピスの変遷および販売店舗数の変遷を現地調査した。

### 4. 研究成果

本研究により、ルーラル・ツーリズムおよび観光全般、エコ・ツーリズムなど自然観光、土産物を含む文化と伝統の各研究ユニットでの調査結果として、以下のことが明らかになった。

(1)インドネシアにおける観光動向および観光政策については、インドネシア国内では経済成長に伴い都市部のインドネシア人による国内各地への旅行量が増加傾向にある。インドネシア政府による観光政策も長年にわたるバリ島一辺倒のインバウンド政策から、近年では地方レベルでの文化を生かした観光施策も重要視されている。

(2)ランブン州は、スマトラ島の南端部に位置し、北部を除く3方が海岸線となっている。海岸部での観光は、ランブン湾周辺に小規模の宿泊リゾート施設があり、キロアン島(スマンカ湾東端)ではボートでのイルカ観察も可能であるが、いずれも小規模である。また、西部のインド洋岸では近年サーフィン利用が盛んになり、海外からの利用者も急増している。しかし、インド洋岸は波浪などの影響もあり、マングローブ林が発達しているのは東側のジャワ海沿岸と南部のランブン

湾の一部である。これらのマングローブ林も、沿岸部の開発、気候変動の影響も懸念される高潮、そして違法な薪炭伐採などのために減少しつつある。

#### <ルーラル・ツーリズム>

(3) ランブンプ州での原住のランブンプ人は元来、高床式家屋で生活をしてきたが、インドネシア独立後の1950年代からの移住政策によって、ジャワ島からの移民がランブンプ州に流入した。その過程でランブンプ人と他民族の混住化が進むが、特にジャワ文化の影響を受け、家屋もジャワ人の土間式が主流になり、ランブンプ文化の高床式家屋が次第に減少した。現在では高床式家屋は農村部にわずかに見られるのみとなっている。

(4) ランブンプ州の州都バンダールランブンプ市から約3時間の距離に位置する東ランブンプ県ワナ村は労働者の95%が農業に従事する農村で、村の中心部には2kmにわたり高床式家屋が立ち並ぶ地域がある。1990年にランブンプ州文化観光局によりこの地域が文化観光村に指定され、州内外に向けた積極的な宣伝・PRが行われると、高床式家屋の景観と村に伝わる踊りの鑑賞を目的とした観光客が増え、3軒の民家での宿泊客受入も開始された。しかし、1998年のアジア通貨危機により州政府からの支援が得られなくなり、次第に観光客が減少。現在は年間数十人の観光客となっている。

(5) ワナ村の高床式家屋の住民へのヒアリングおよびアンケート調査(2013年に実施、調査対象100人)によると、ほとんどが零細な農業を家計の柱とし、臨時の仕事から副収入を得て生活している。高床式の家屋の観光的価値や保存の重要性を認識しつつも、大規模な家屋を補修・維持するためにかかる費用の捻出に困窮するなど、経済的事情によりそれが困難となっている。平均して築80年を経過した家屋は老朽化が目立つものが多く、さらに平屋の家屋に建て替えたケースも見られ、高床式の家屋が並ぶ景観が壊れつつある。家族構成は、第2子以降は就業時に家を出て集落外で生活するケースが増えているが、地域コミュニティの結束は強く、集落でのさまざまな行事も継続されている。一方で、都市部の高所得者のなかには、農村地域の高床式家屋を自宅の敷地内に建築するケースも見られる。

(6) 都市住民の観光動向およびルーラル・ツーリズムへの意識に関して、バンダールランブンプ市において実施したアンケート調査(2013年、調査対象200人)によると、物見遊山型の観光よりも海水浴などのレクリエーション型のレジャー活動が多くみられ、ワナ村の高床式家屋への訪問のようなルーラル・ツーリズムへの参加率は低い。その一方

で、都市住民からのルーラル・ツーリズムへのニーズは高いことがわかった。

#### <エコ・ツーリズム>

(7) ランブンプ州内の国立公園は、「生物資源および生態系保全法」(1990年)に基づき指定されている「自然保存地域」の一形態として、ワイ・カンバス国立公園と南プキット・バリサン国立公園が指定されており、国立公園管理計画により、原生ゾーンなどの自然保護を主体とする区域と利用ゾーンなどのレクリエーション利用に供される区域などに分類(ゾーニング)されて管理がなされている。

(8) ワイ・カンバス国立公園には、野生ゾウの回復施設であるゾウ訓練センターがあり、ゾウの曲芸などの見世物とゾウによるトレッキングなどの観光客を対象としたプログラムや観光施設の整備が行われている。一方の南プキット・バリサン国立公園は、世界遺産「スマトラの熱帯雨林」に登録(2004年)されてはいるが、日本のような観光対象とはなっていない。ワイ・カンバス国立公園では年間利用者約1万3千人のうちの97%が国内観光客であり、遊園地的なゾウのアトラクションを求めての来訪で、ゾウトレッキングなどのエコ・ツーリズム的な利用者は少ない。一方、南プキット・バリサン国立公園ではそのような施設も整備されていないため、年間利用者数は約1800人ととどまり、世界最大の花ラフレシアの開花時などに観光客が訪れる程度である。スマトラの熱帯雨林として世界遺産に登録され、オランウータンのリハビリ施設もあって野生復帰したオランウータンをガイドの案内で見ることが出来るグヌン・ルーサー国立公園の利用者数はワイ・カンバス国立公園と同程度の約1万7千人であるが、79%が外国人であることと比べると、国内外の利用者数と観光客の質、観光目的の違いが明らかである。ランブンプ州内の国立公園でのエコ・ツーリズム観光増進の余地は十分あると考えられる。

(9) 国立公園管理と地域社会との関係については、ランブンプ州内に存するワイ・カンバス国立公園と南プキット・バリサン国立公園も基本は国有地であり、管理計画に基づいて管理がなされているが、地域社会との関係などの実態は大きな差異がある。すなわち、ワイ・カンバス国立公園では、公園指定前に入植していた住民を含め、公園内での地域社会による生物資源および土地の利用をすべて禁止し、住民を追放する施策をとった。それに対して、南プキット・バリサン国立公園では、違法に侵入した住民によって原生林が伐採され、コーヒーやコショウなどの粗放なプランテーションが経営されており、熱帯林の消失の一因ともなっている。

(10) マングローブ林に対する意識について、バンダールランブン市内の都市住民とマングローブ林の存する沿岸住民に対するアンケート調査を実施した(2013年調査、調査対象120人)。マングローブ林の環境・人間に対する重要性については、都市住民、沿岸住民ともに肯定的だが、沿岸住民の方がより重要性を認識している。マングローブ林内にエビ養殖場などを造成することについては、都市住民の半数近くが適否は不明であり、適当としたのも3割弱だったのに対して、沿岸住民では適当でないとするものが7割以上にのぼった。また、マングローブ林の存在が住民の主な収入源となるかについては、都市住民の3割が肯定的だったのに対して、沿岸住民では7割以上が否定的だった。マングローブ林の管理への参加意識は、都市住民よりも沿岸住民の方が積極的であるが、参加する段階では都市住民が計画段階からとするのに対して、沿岸住民は実行段階からが多かった。

#### <土産物の開発・販売>

(11) ランブン地方で食品以外の土産物に用いられるモチーフは、ワイ・カンバス国立公園のゾウと、この土地で昔から慣習法儀礼で使われてきたテクスタイルの文様がその代表である。ワイ・カンバス国立公園では、怪我などで野性の集団からはぐれたゾウの保護を目的に、タイから調教師を招き「ゾウ学校」を設立以来、様々なアトラクション用に調教されたゾウをその飼育係とともに、要請のあったインドネシア各地に派遣している。それ故、ゾウはランブンのシンボルともなっていて、州都バンダールランブンの中心ロータリーの一つにも、モニュメントとして使われている。木彫の置物をはじめ様々な小物の土産物や、Tシャツの文様などに多用されているが、洗練された土産物として、デザイン的にも技術的にも更なる改良が求められる。

(12) ランブン起源のテクスタイルであるランブンタピスの美術的価値は、むしろ欧米諸国によって見出されたと言える。以来、民間の商業目的でのタピス復興の機運が生まれた。その後、その美しさを好んだ州知事夫人などが公式行事の折々にこれを使用し始めると、次第に慣習法儀礼以外でもより広く着用されるようになり、新しいタピスがそれなりに大量に購入されていった。ランブン大学の協力を得て行った聞き取り調査によると、バンダールランブン市内のタピス販売店舗数は1980年～2010年の間で年々増加している。

#### <持続可能な観光と地域コミュニティのバランスモデル>

(13) 本研究によって明らかにされたことをもとに、持続可能な観光と地域コミュニティのバランスモデル図の構築を試みた(図1)。持続可能な観光の成立には、地域コミュニテ

ィが維持されていることが必要な条件でありことが確認された。しかしながらインドネシアでは、農村地域におけるルーラル・ツーリズム、国立公園におけるエコ・ツーリズムを維持するシステムがまだ構築されておらず、そのための課題も多い。

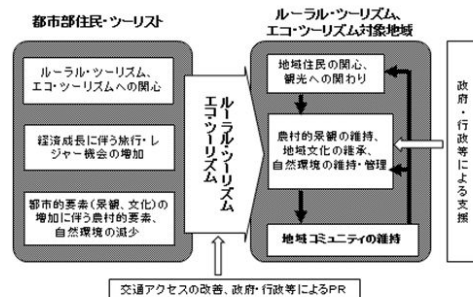


図1 持続可能な観光と地域コミュニティのバランスモデル

(14) ルーラル・ツーリズムの場合、観光資源となる農村景観、とりわけ(高床式)家屋の老朽化が著しく、その維持や保存のための政府あるいは行政等による支援が急がれる。エコ・ツーリズムの場合も、研究対象地域のランブン州内では観光客の数は多くないが、その対象となる自然資源は十分存在している。沿岸住民のマングローブ林への生活依存と保全意識は都市住民よりも高く、観光開発に際しては慎重に行う必要がある。また、ランブンでのテクスタイルの復興とその展開には、ランブン人自身の熱意とともに外部からの刺激と補助によるものであり、都市住民に対するルーラル・ツーリズムへの関心を高めた一助となっている。

(15) 近年経済発展により観光開発が進みつつも、一方で自然や文化が急速に消失しているランブン州において持続可能な観光を進めていくためには、地域資源となる農村地域の伝統的家屋および景観の維持や保存、国立公園内野生生物のエコ・ツーリズムへの活用、さらには、マングローブ林および伝統的なタピスなどの芸術工芸を、地域住民の意識と生活を尊重したコミュニティ維持を意識しつつも、観光に活用することが求められる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

山田耕生, インドネシアにおける観光政策の特徴と課題 - 2000年以降の観光客流動からの分析 -, 尚美学園大学総合政策論集 19, 査読無, 2014, 117-128

〔学会発表〕(計5件)

山田耕生, インドネシア・ランブン州における観光政策, 日本国際地域開発学会 2014

年度秋季大会，2014年11月22日，九州大学  
(福岡県・福岡市)

山田耕生，インドネシア農村地域における  
伝統文化を活用した観光の可能性，日本地理  
学会2014年秋季学術大会 2014年9月20日，  
富山大学(富山県・富山市)

Kosei Yamada，The problem and  
possibility of sustainable tourism in  
rural areas of Indonesia, International  
Geographical Union Regional Conference,  
2014年8月20日，クラコフ(ポーランド)

Susumu Takahashi，Arief Darmawan，  
Classifying national parks according to  
the relationship between the governance of  
the national park and the local  
communities in Indonesia，14th Congress of  
the International Society of Ethnobiology  
(ISE)，2014年6月5日，プムタン(ブー  
タン)

山田耕生，インドネシアにおける観光政策  
の現状と課題，日本国際地域開発学会 2012  
年度秋季大会，2012年12月8日，新潟大学  
(新潟県・新潟市)

[図書](計1件)

高橋進，明石書店，生物多様性と保護地域の  
国際関係 対立から共生へ，2014，239 ペ  
ージ

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高橋 進 (TAKAHASHI Susumu)  
共栄大学・教育学部・教授  
研究者番号：50360087

### (2) 研究分担者

山崎 美恵 (YAMAZAKI Yoshie)  
共栄大学・国際経営学部・客員教授  
研究者番号：30258925

山田 耕生 (YAMADA Kosei)  
帝京大学・経済学部・講師  
研究者番号：70350296